

謎の流し「キー坊」を追って

取材中の一夜、唐戸の赤間ブラザ付近で、ギターを肩にかけた味のある人物が、カラオケ喫茶の一軒に入っていくのを目撃した。「流し」にちがいない！ その店の扉をあけると、



ギターの男性は歌手とも素人とも違う唱法で歌い始めていた。3曲歌って、一人の客からお札1枚受け取り、そそくさと消えた。記者も客になり、店のマスターに確かめた。

「今の人は？」

「下関に残っている唯一の流しの方で、みんなに「キー坊」と呼ばれています」

カラオケの向こうを張って、今も流しが生き残っている下関。いやはや、懐の深いまちである。



モーニングのある「居茶珈屋」

「二次会は居酒屋だ」と言われて着いた先が、唐戸にある喫茶店の「居茶珈屋」。「34年前の開店当時は、そうやって名前を覚えてもらいました」と、マスターのと、マスターの沼真治さん。その頃、まだ街の喫茶店は全盛期、携帯電話もなく、

「二次会は居酒屋だ」と言われて着いた先が、唐戸にある喫茶店の「居茶珈屋」。「34年前の開店当時は、そうやって名前を覚えてもらいました」と、マスターのと、マスターの沼真治さん。その頃、まだ街の喫茶店は全盛期、携帯電話もなく、



喫茶店は格好の待ち合わせ場所だった。中にはコーヒーのお代わりを重ねたあげく、ついに相手は現れず、ヤケ酒を飲み、本物の居酒屋へ、という逆コースもあっただろう。喫茶店だけに茶目っ気のあるネーミングのこの店、朝8時からのモーニングが、地元唐戸の常連客やホテルの宿泊客に重宝されている。

昔、「大洋ホエールズ」は 下関にいた



プロ野球セ・リーグ「横浜ベイスターズ」の前身「大洋ホエールズ」の出発点が下関であったことを知る人は少なくなつたのではないだろうか。かつて下関には大洋漁業の本社があり、1950年、プロ野球が2リーグ発足を謳った際、大洋は下関を本拠地としてセ・リーグに加盟した。初年度は8チーム中、5位。そ

の後、関西を経て55年、神奈川県川崎市へ移転した。78年から横浜市に再移転して「横浜大洋ホエールズ」となり、93年から「横浜ベイスターズ」に。そうした歴史から、数年前まで現在の下関球場で公式戦が行われていた。地元の野球通に、オールド・ファンが集まるような店がないかどうかをうかがったところ、「もはや、ソフトバンクファンが多い」との答え。

ただ98年に38年ぶり2回目のリーグ優勝と日本一を成し遂げた時は、「当店にファンの方が集まって、祝杯をあげました」と「下関くじら館」（6ページ参照）の女将・小島康子さん。二つの港町を結ぶノスタルジーあふれる話だった。



街を歩けば 「カラオケ喫茶」に 当たる

下関の街を歩いていて気づくのが「カラオケ喫茶」と打ち出した店の多いこと。喫茶というのだから、当然、昼間から営業している。アルコールもあるが、ランチとカラオケ3曲で1000円、などというシステムの店もある。ドアの外に立ってみると、おおむね年輩客らしい人の歌声が響いてくる。

ある店で質問した。

「人口に対して、カラオケ屋さんが多すぎるような気がしますか？」

「もともと、芸にこだわりのある都市ということもあるし、スナックのままでは経営難のため手頃な喫茶スタイルに変えたという面もあるでしょう」

いずれにしろ

下関という街は、そこらじゅうを「隠れ歌手」が行き交っていることになる。

